



第58号

編集室 〒794-2114  
愛媛県今治市吉海町  
名2916-2 高龍寺内  
TEL 0897-84-2129  
FAX 0897-84-4495  
Eメール chiho@mg.pikara.ne.jp  
責任者 鴨井 智峯

### 新年のお慶びを申し上げます 高龍寺院家

**総本山仁和寺に奉職することとなりました。**

この度総本山仁和寺より要請があり、仁和寺の執行及び真言宗御室派の総務部長に、任期四年で就任することとなりました。

勿論、予想していなかったことですので、驚き、戸惑い、家族や寺総代様、そして親しき友人にも相談し、奉職することに致しました。

ですから、平日は基本仁和寺に住むことになりましたが、交通機関も便利な時代となりましたので、一か月に数度、週末は帰山出来るとのことですので、ご法事が集中する週末や連休などは、檀家様のお勤めが出来るように、仁和寺と自坊を行き来するつもりです。

とは言いますが、平日は副住職一人になりますので心配もありますが、副住職も本山から帰山し、七年になりますので、期待もしております。

檀家様には何卒ご理解賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

お時間の許す方は、ぜひご覧ください。



平成30年1月3日 午前7:20~8:00  
NHK デジタル総合  
「御室 仁和寺」(仮題)  
仁和寺の特番が放送されます。ぜひご覧ください。

## 永代供養墓「沙羅の縁」 建立



急激な時代の変化に戸惑う昨今ですが、それはお寺を取り巻く環境も同じ事で、檀家様とお話していると、墓地の継承や管理に関し心配している方が多くおられるのも事実です。そこで高龍寺では永代供養墓観音廟を建立し、住職としてもこれで住職を勤めている間は大丈夫と安心しておりましたが、時代の変化は想像以上に早く、観音廟の全ての区画が契約済みとなりました。

そこで檀家様の代表者の総代会で協議を重ね、新たな永代供養墓を建立する事となり、ほぼ完成いたしました。

平成30年より契約のご相談ができる運びとなりましたので、お寺までお問合せ下さい。



日本遺産  
**村上**

### 高龍寺が日本遺産に

皆さん御存じのように、高龍寺はその昔、村上水軍の祖・村上義弘公の菩提寺であります。この度、文化庁より村上海賊が日本遺産の指定を受け、その中で、高龍寺と亀老山中腹にある義弘公墓所が、構成文化財の認定を受けました。亀老山という山の名前は高龍寺の山号ですが、近年は展望台が全国的にも景勝地として有名になり、多くの方々が訪れております。展望台と共に一人でも多くの方が、この土地の歴史や文化に触れ、村上海賊が伝承されていきますことを願う所です。

# 弘法利生こそお大師様の御心

高龍寺住職 鴨井智峯

(御室派住職副住職向けの布教資料として著しました原稿を転載させて頂きました)

お大師様と聞けば、間違いなく誰もがあの弘法大師を思い浮かべられると思いますが、実は天皇より大師号を賜ったのは歴史上二十五名もおられ、中には浄土宗の開祖法然上人のように、お一人で八つのお大師号を賜ったお祖師様もおられます。

「大師は弘法にとられ、太閤は秀吉にとられ」と言う諺がありませんが、これは二十五名もお大師様がおられても、大師と聞けば誰もが弘法大師を思い浮かべ、太閤と聞けば、どなたもが豊臣秀吉のことを思い浮かべるように、余りにもお二人の存在が大きいため、他の方々は霞んでしまっていることを伝えるものです。それだけ、弘法大師の存在は大きく、宗派を超えてお祖師様本人が信仰の対象になっている、唯一のお大師様だと言えます。

では、皆さんが当たり前のように呼んでいる弘法大師という諡号ですが、何時、どのような過程を経て呼ばれるようになったのかをお話しします。そこには仁和寺を開かれた宇多法皇の、執念とも思える空海上人への篤い信仰心があればこそその話なのでした。

そもそも宇多天皇は、皇位継承から遠いお立場で育ちましたので、源定省と名乗り、幼少期から比叡山で修行する生活を続けておられました。ところが、お父様が五十八代天皇になられたことで、ご自身の立場も一変したのです。

号まで添えて奏上されたと伝わっています。

本覚とは、誰にでも仏性があり、誰でも成仏ができるという教えですので、宇多法皇が空海上人の教えを読み解かれた上でのお考えであると思われます。しかし天台宗にも本覚思想がありますので、認められる事は無かつたのでしょうか。

ところが時代は下り、花園天皇の世、徳治三年(一一三〇八)に宇多法皇の師である益信僧正に、本覚大師の諡号が贈られました。このことが、もし宇多法皇のお耳に届くことが叶うならば、法皇は感嘆のお涙を流されたことでしょうか。

では弘法大師という諡号の出処と申しますと、宗祖自ら残された一通の手紙に見ることができます。その手紙とは、高野雜筆集の中に、宛名や書かれた年号が不明の一通の手紙のことですが、その文面から、宗祖が弘仁一二年(八二二)に太政大臣・藤原冬嗣に送った手紙の写しといわれています。藤原冬嗣は、嵯峨天皇の信頼が厚く、宗祖と嵯峨天皇との絆を一番近くで理解されていた方だと思われる。

その手紙の内容は、嵯峨天皇への感謝の言葉と数名の弟子達の名前を記し、どのような内容を伝えているかを問い、文面には五十が近くになり、髪も薄くなって老境に入り、国にこれ以上の迷惑を掛けるのは忍びないので、自分への国費を停止して頂きたいとの内容が続いて記されています。

そして手紙の文末には、大臣に対し、白雲が我々を隔てる時が来ても我々の心は一体であり、共に教えをひろめて人々を救済(弘法利生)し、同じ覺りの園に遊ばんことをと、宗祖と大臣の厚い友情

そして五十九代宇多天皇は、父である五十八代光孝天皇の思いを継ぎ、西山にお寺を建立し、開創が仁和四年と言うことで、仁和寺と命名されたことは有名ですが、その時の益信僧正との出会いが宇多天皇の人生の方向を決めたといっても過言ではありません。

益信僧正は、真言第三世の源仁僧正より法を受けて真言四世になられ、広沢の祖と言われるお方で、お大師様の実弟の真雅様にも師事されたお方です。宇多天皇はその益信僧正から空海上人が伝えられた真言の教えを聞く毎に、父の思いを引き継ぎ仁和寺を建立した意味をご自分の中で理解しようと思いを巡らされた事でしょう。

その思いは日に日に大きくなり、寛平九年(八九七)には皇子である醍醐天皇に譲位し、益信僧正に従い落飾され、延喜元年(九〇一)には伝法灌頂に入壇し、仁和寺に御室を造営して、ご自身もそちらに移ると、日々の行法に研鑽に励み、伝法灌頂を開壇され、法灯を授けるお立場となりました。

宇多法皇の宗祖に対する思いは、篤く諡号を賜りたいと皇子である醍醐天皇に何度も奏上しますが、当時の天台宗の勢力は強く、既に貞観八年(八六六)、最澄僧正には没後四十四年で伝教大師を、円仁僧正には慈覚大師を、没後二年でも賜って久しいのですが、空海上人には法印大和尚までしか頂けず、本覚大師を賜りたいと諡

をしたためています。

この手紙は、入定後八十六年の時を経て、醍醐天皇の目に留まることとなり、これぞ空海上人の御心と読み解かれ、弘法大師と諡号が贈られて、直ちに延喜二年(九二二)に勅使少納言平維扶卿と東寺長者観賢僧正により、高野山奥ノ院廟前にて報告されたのでした。

観賢僧正が、無明の橋まで戻りました時に、後ろに気配を感じ振り返りますと、汝の仏性を拝むなりとの声を聴き、感激した観賢僧正の心の底から称えた言葉が「南無大師遍照金剛」の御法号であります。

